

Keio
Research
Center
for
the
Liberal
Arts

Annual Report 2021

慶應義塾大学
教養研究センター

2021 年度
活動報告書

2021年度 活動報告書

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for the Liberal Arts

は じ め に

慶應義塾大学教養研究センター所長 小菅隼人

教養研究センター 2021 年度活動報告書をお届けします。

2021 年度、新型コロナウイルス感染症流行は、いまだ終息することなく、落ち着きを見せたかと思うと急拡大に転じるといった波を繰り返し、教育研究活動は大きな影響を受けています。減少の兆しがみられ、マスクの着用緩和の議論が出始めた昨今ですが、それでも 2022 年 5 月 22 日現在、東京都で 3,317 人の新規感染者（累計 1,516,704 人）を記録し、第 7 派が始まっているとの指摘もあります。慶應義塾大学においても、対面授業を徐々に再開していく方針を 2021 年度より打ち出しましたが、ゼミ懇親会や合宿など会食を伴うアクティビティは実施できず、教養研究センターでも「庄内セミナー」は前年度に引き続き 2021 年度も中止となりました。

さらに、沖縄返還 50 年を迎えた 2022 年に入り、2 月 24 日にロシアがウクライナに侵攻するという事件があり、それに西側諸国が団結して対抗措置を取るという展開のなかで、世界は核使用という最悪の事態をも予想させる不穏な空気に包まれています。私たちの生活も燃料価格の高騰や、ロシア上空を飛行できないことによる減便など無関係ではありません。連日コロナウイルスについて報道していたテレビのワイドショーは、今はウクライナ問題一色となりました。この問題については、私たちは報道や SNS 以外の情報取得手段を持っていませんので、どちらか一方を断罪することはできませんが、それでも世界では思いもよらぬ形で、突然、命の危機に晒される大惨事が起こりえるという現実を、東日本大震災やコロナ禍でそれを十分経験した我々にも、改めて思い起こさせることになりました。

学外においても、学内においても、実際に活動を制限され、ともすれば、私たちの活動意欲を奪いかねない事態が続く中、それでも、教養研究センターは、“このような難しい判断を迫られる時こそ教養の力が必要である、このような精神的に追い詰められる時こそ教養の灯を消すことなく、一層充実した研究教育活動に邁進すべきである”という信念のもとに、私たちにできることを再検討して模索した結果、2021 年度は、いくつかの大きな成果が得られました。まずは、2021 年度秋学期には、前年度は中止を余儀なくされた「日吉キャンパス公開講座」を、感染症流行の狭間をぬって奇跡的に実施することができました。講師陣も全員不織布マスクを着用しながらの講義でしたが、非常に充実した内容で、200 名以上の受講者が近年にない出席率で熱心に取り組んでくれました。実験授業「情報の教養学」、設置科目「アカデミック・スキルズ」などの教育活動も工夫を重ね、形態も変えながら継続しています。学外からも好評をもって迎えられているアカデミック・スキルズ 10 分講義ビデオも新たなタイトルがリリースされ、日吉行事企画委員会（HAPP）では、20 年以上続く舞踏公演も、笠井叡の渾身の踊りによって無観客収録配信ながら実施されました。「高大連携プロジェクト」においては、空間現代のサウンドを纏いつつ、吉増剛造による言葉が、命を吹き込まれて日吉キャンパスを満たしました。

有難いことに、教養研究センターの教育研究活動へのご支援とご協力は、この状況にも拘わらず広がりを見せています。とりわけ寄附講座について、株式会社白寿生科学研究所様、株式会社コーエーテクモホールディングス様から変わらぬご支援をいただいております。また各所より新たにご寄付のお申し出をいただき、暖かい激励を賜った気持ちでおります。慶應義塾高等学校、慶應義塾体育会との連携プログラムも進み、教養研究センターは、このコロナ禍を経たことによって、さらに一段と充実した、新しい段階に入ったと言ってもいいでしょう。2022 年度は運営体制も一新して、新しい教育研究プログラムの企画に取り組もうと考えています。私たち所員も、なお一層、努力する所存ですので、何卒今後ともご指導とご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

目 次

はじめに	3
組織構成と事業計画	5
2021 年度事業報告	6
広報・発信	8

I 研究関連プロジェクト

基盤研究・一般研究・特定研究	10
基盤研究	
教養教育研究 実験授業「ゲーム学」	11
教養連接研究 高大連携プロジェクト	12
教養連接研究 文理連接プロジェクト	13
研究成果公表	
学会・ワークショップ等開催支援	14
＜選書刊行記念企画＞ 著者と読む教養研究センター選書	15
研究交流	
研究の現場から	16

II 教育開発関連プロジェクト

1 設置科目	17
1-1 身体知・音楽	18
1-2 日吉学	19
2 実験授業	
情報の教養学	20
3 「学び場」プロジェクト	21

III 交流・連携関連プロジェクト

1 日吉行事企画委員会（HAPP）	22
2 日吉キャンパス公開講座	24
3 「創造力とコミュニティ」研究会	26
4 武藤浩史教授最終講義	28

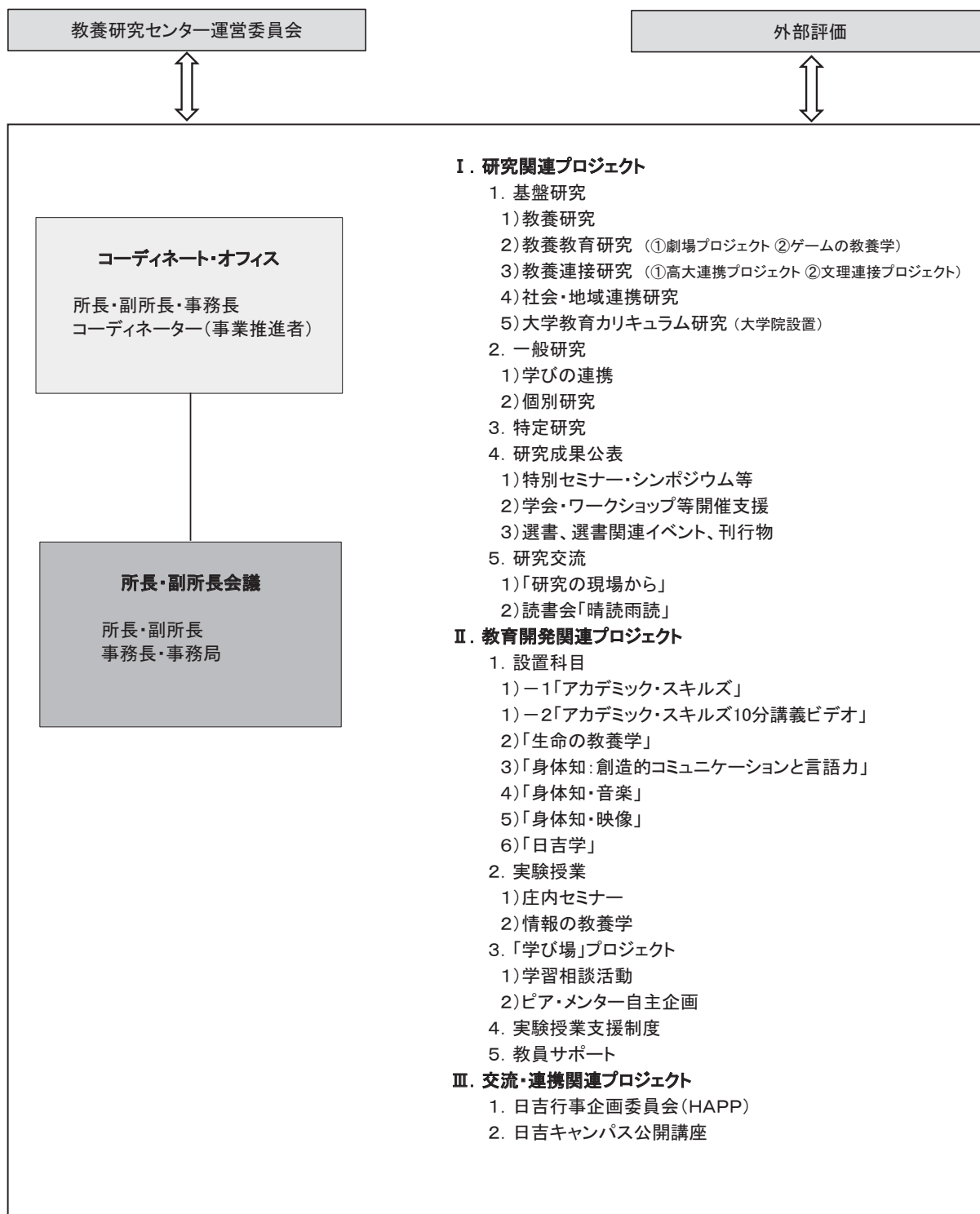
資料編

1 慶應義塾大学教養研究センター規程	29
2 運営委員会委員	31
3 組織構成員	32
4 2021 年度の主な活動記録	33

※本報告書では、各プロジェクトを便宜上3つのカテゴリーのいずれかに分類しました。

※所属・職位は授業、イベント等開催当時のものです。

教養研究センター組織構成と事業計画(2021年度)



コーディネート・オフィスは、運営委員会の付託を受けて教養研究センターの日常的な活動を執行する機関です。約20名のコーディネーターから構成されています。所長・副所長・事務スタッフに加え、教養研究センターの極めて多彩なプログラムを統括する代表や中心メンバー、学部や関連研究所からのメンバーが加わっています。教職一体での運営というのが教養研究センター設立からの理念ですが、これを実行しているのがコーディネート・オフィスです。

詳しい報告は各項目に譲るとして、ここでは、当初計画による形式上の分類に捉われず、内容から全体を概観して、研究活動、設置科目、啓蒙・サポート活動、地域連携活動として概要を述べる。

1 研究活動について

A) 2021 年度も前年度同様「大学教育カリキュラム研究」については特段の研究活動はない。しかし、日吉のカリキュラム作成において大きな改革ポイントとなった日吉カリキュラム検討委員会の設置は、教養研究センターの基盤研究の一つの成果であり、大学における教養とカリキュラムの関係の重要性に鑑みて、今後も教養研究センターの事業として設置する予定である。2020 年春より始まったコロナ禍は 2021 年度には、幾分の落ち着きをみせた。すなわち、キャンパス閉鎖はなく、秋学期には対面授業に戻される科目も増えた。今後、完全にコロナ禍以前に戻るのか、あるいは、授業の形態そのものに革新的な変化がおきるのかは 2022 年度の状態を注視する必要がある。そのための受け皿となることが期待される。

B) 基盤研究「教養研究」の講演会とシンポジウムは、コロナ禍のために実施することができなかった。しかし、2022 年度の再開に向けて検討し、2022 年度春学期の研究講演会を実施できる見通しが立ったことは、明るい材料である。

C) 「高大連携プロジェクト（教養の一貫教育）」において、教養を軸とした高校と大学の連携が 2019 年度に始動した。2020 年度はコロナ禍のため、中止となったが、2021 年度、慶應義塾高等学校の合意を得て、慶應義塾高等学校の施設である日吉協育ホールにおいて、多数の高校生と大学生の参加によって、講演会が実施できたことは大きな成果であった。

D) 「文理接続プロジェクト」は、理工学部の荒金直人副所長と見上公一専任講師を中心に基本的プランを練り、非常に充実した内容をもった 10 回の研究会が行われた。対面での直接討論は叶わなかったが Zoom を使ったオンライン上での議論は、コンスタントに 10 名程度の参加者を得て、またコアメンバーもほぼ固まって、組織として定着しつつある。特に自然科学研究教育センターの井奥洪二所長、本センターの寺沢和洋副所長（医学部）の参加を得て、塾

内連携の体制が整いつつあり、このプロジェクトの発展が見込まれる。ブログでの広報はあるが、今後、論文集としての成果発信が計画されている。

E) 「社会・地域連携研究」については、2020 年度同様、横山千晶教授によるコミュニティ研究が主たる成果である。コロナ危機によって分断された社会において新しいコミュニティの研究は、喫緊の課題である。この研究はコロナ禍にあっても果敢に今後のさらなる展開が望まれる。

2 設置科目について

A) 「アカデミック・スキルズ」「生命の教養学」「身体知」：2020 年度をもって極東証券株式会社の寄付が終了し、極東証券寄附講座としては閉幕した。しかし、今後、新たな寄付元の開拓と特別な予算的措置を行い、一部でも復活させたいと考え、2021 年度はその方法を模索した。結果、2022 年度より再開する具体的な検討を経て、実施する予定である。

B) 「アカデミック・スキルズ 10 分講義ビデオ」：2019 年度よりリニューアルを進めた「アカデミック・スキルズ 10 分講義ビデオ」は前年度までの 15 本に 2021 年度は 6 本を加えて 21 本となった。タイトルによっては 8,000 件を超える閲覧数があり、全国から問い合わせもあり好評を博している。

C) 「身体知・音楽」：白寿生科学研究所寄附講座として「身体知・音楽 I II」は、教養教育の一環として音楽芸術の良き理解者を未来社会に派遣することを目指している。音楽を通して教養教育のさらなる展開が期待される。2021 年度は、株式会社白寿生科学研究所からの寄付を受けた寄附講座として、2 つの授業が開講された。一つは「古楽器を通じた歴史的音楽実践」（器楽クラス）であり、他方は「合唱音楽を通じた歴史的音楽実践」（声楽クラス）であった。後者では、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、授業時における飛沫の拡散が心配されたが、2020 年度の経験を基に対策を施すことにより、濃厚接触者を出すことなく無事に終了することができた。器楽クラスは、通常の形態に近い形で授業を運営した。なお、2021 年度より、木内麻理子商学部専任講師（音楽）が、声楽クラスを受け持った。

D)「日吉学」：株式会社コーエーテクモホールディングス寄附講座である「日吉学」は正規科目となって3年目を迎えた。学生と教員の対話やフィールドワークを重んじる日吉学にとって、コロナ禍は大きなハードルとなり、2021年度も授業形態に頭を悩ませる始まりとなった。それでも、緊急事態宣言の合間を縫いながら、テーマ「戦争編」の活動の一つとして連合艦隊司令部の地下壕見学を実施できたことは学生にとって大きな収穫といえる。

E) 実験授業「ゲーム学」：ビデオゲームは、様々な分野で影響力を増しており、学生の関心も高い分野である。義塾においても今後、ゲーム研究を体系化し、その成果を塾生と共有することが必要とされる。実験授業「ゲーム学」はこの懸案に対するひとつの試みであった。当初は2020年度春学期に開講が予定されていたが、感染症拡大を受けて中止となり、2021年度秋学期に全5回の日程で実施された（対面とオンラインの併用）。

3 啓蒙・サポート活動について

A)「日吉キャンパス公開講座」：前身の「横浜市民大学講座」から数え47回目を迎えた2021年度「日吉キャンパス公開講座」を10月30日から12月11日の日程で開催した。2020年度は新型コロナウイルス感染症拡大により中止となったため、2年ぶりの開催となった。コロナ禍において、寺沢和洋副所長を中心に、受講者、講師陣、運営サイドの一致協力した努力のもとで、この講座が再開できたことは2021年度の教養研究センターの最大の成果である。

B)「情報の教養学」：近年の高度情報化社会の急速な発展における最新の話題を提供することを目的とした講演シリーズである。2021年度は、春学期に2件のオンデマンド講演、秋学期に3件の対面の講演を実施した。

C)「学習相談」：コロナ禍によって大きな影響を受けたが、相談件数も徐々に戻りつつある。今後、日吉メディアセンターとの協力のもとで一層充実させていくことを目指している。

D)「研究の現場から」：前年度に続いて、オンラインによって実施された。コロナ禍による分断によってさらに人の繋がりが求められる中、貴重な機会となった。オンラインによってかえって参加しやすくなった面はあり、今後、対面と

オンラインの併用も視野に入れることができる。

E)「学会・ワークショップ等開催支援」：コロナ禍によって、各学会の対面開催が中止になったことを受けて、日吉での開催に拘らず、オンラインでの実施も支援対象として募集をおこなった。

F)「読書会」：2021年度は、コロナ禍のため、残念ながら実施することができなかったが、あらたに村上春樹の読書会が企画されて、2022年度より再開の目途がついたことは大きな成果である。

G)「最終講義」：2022年2月3日、法学部の武藤浩史教授の最終講義が教養研究センター主催で開催された。教養研究センター主催の最終講義としては、羽田功名名誉教授に続いて、2回目である。来往舎のシンポジウムスペースを会場とし、ほぼ満員の観客に加えて、オンラインでも生配信された。今後、日吉に最終講義の文化が根付いていくことが期待されている。

4 地域連携活動について

A)「庄内セミナー」：コロナ禍によって実施できなかったが、鈴木亮子実行委員長、大古殿事務局長、教養研究センター所長の三人を中心に、次年度実施の計画が練られ、2022年度より再開する目途がたったことが成果である。

B) 日吉行事企画委員会（HAPP）：前年の形式を引き継ぎ、新たな内容で展開された。コロナ禍の中、中止の行事もあったが、オンラインなど形式を工夫して、舞踏公演、音楽関係のイベントを実施した。特に、イベントテラスにて無観客によって収録された「笠井叡舞踏公演：使徒ヨハネを踊る」は、YouTube上ですでに約1,500回の視聴を得ている。別途インタビュー映像も公開された。また、2020年度におこなった「笠井叡舞踏公演：日本国憲法を踊る」は、引き続き公開され、累計で約4,000回の閲覧数を記録している。1990年代にはじまった新入生歓迎行事は、日吉の各教員、職員、学生を繋ぎ、学部教育からこぼれ落ちた知を結びつける活動の受け皿として、その後、日吉行事企画委員会となり、今日の教養研究センターの一つのルーツとなった。今後の継続と発展が期待される。
(小菅隼人)

教養研究センターでは、様々な活動の広報に努め、センターの意義を常に発信している。講演会や公開講座などはポスター、チラシによって告知するとともに、ウェブページを活用して最新情報を随時発信し、研究・教育活動の周知を行っている。また、活動成果を公開する書籍などの出版にも力を入れている。

1. 教養研究センター選書

■中谷彩一郎『教養研究センター選書 22 「ダフニスとクロエ」の世界像——古代ギリシアの恋物語』
2022年3月31日刊行

センターでは、研究の前線を一般にもわかりやすい形で紹介することを趣旨として、選書を刊行している。原稿は毎年所員から募集し、査読選考を経て刊行を決定している。2021年度は1作が刊行された。

2. CLA アーカイブズ

■CLA アーカイブズ 37『基盤研究「教養研究」講演記録集 2019年度』
2022年2月28日刊行

センターでは、2017年度より「教養研究」という研究講演会のシリーズを行っている。本記録集では2019年度と2020年度を扱う予定であったが、2020年度はコロナ禍により企画が実施できなかったため、ここでは2019年度の講演会2回を記録している。

3. 報告書

■『教養研究センター 2020年度活動報告書』
2021年8月31日刊行

4. Newsletter (ニューズレター)

■第38号 2021年5月15日刊行
■第39号 2021年11月30日刊行

日吉所属教職員とセンター所員を対象とした広報の一環として、Newsletter を年2回刊行し、半年間の活動についてレポートを行い、今後の予定について告知する。巻頭言などのコラムもある。

5. アカデミック・スキルズ 10分講義ビデオ

「アカデミック・スキルズ」のエッセンスを誰でも手軽に学べるよう、前年度に続いて6本の動画を制作し、ウェブサイトで公開した。

URL: <https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/education/culture/academic.php#movies>

(高橋宣也)

アカデミック・スキルズ 10分講義ビデオ テーマ一覧

歴史学—「事象/現象のネットワーク」から人間の営みを考察しよう—	岩波敦子 (理工学部教授)
美術史を学ぶ	荒木文果 (理工学部専任講師)
大学で音楽を学ぶ	石井明 (経済学部教授)
古典籍 (こてんせき)・くずし字—私たちの今を考える材料として—	津田真弓 (経済学部教授)
スペイン語の世界—大学で学ぶ意義—	アルベルト・ミヤンマルティン (経済学部准教授)
ラテン語のすゝめ	中谷彩一郎 (文学部教授)



津田真弓

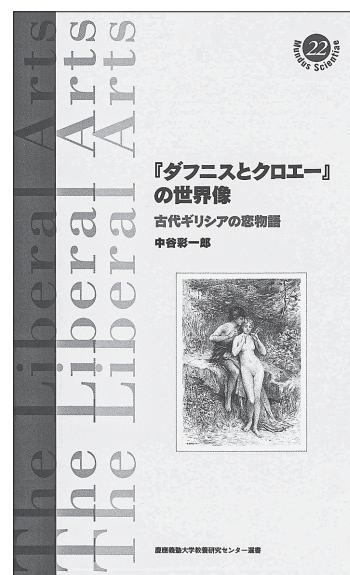


アルベルト・ミヤンマルティン

2021 年度教養研究センター
刊行物一覧



CLA アーカイブズ 37
基盤研究「教養研究」講演記録集 2019 年度
(2022.2.28 刊行)



教養研究センター選書
(2022.3.31 刊行)



2020 年度活動報告書
(2021.8.31 刊行)



Newsletter38 号
(2021.5.15 刊行)



Newsletter39 号
(2021.11.30 刊行)

基盤研究・一般研究・ 特定研究

■基盤研究

1. 「基盤研究」として、現在、構想されているプロジェクトには次の5つがある。すなわち、(1)教養研究、(2)教養教育研究（①劇場プロジェクト、②ゲームの教養学）、(3)教養連携研究（①高大連携プロジェクト（「教養の一貫教育」）、②文理連携プロジェクト）、(4)社会・地域連携研究、(5)大学教育カリキュラム研究（大学院設置）である。(1)～(3)はいずれも、コロナ禍によって大きな影響をうけた。また「社会・地域連携研究」、「大学教育カリキュラム研究」についても以下に略述する。
2. 「教養研究」については、コロナ禍のため講演会・シンポジウムともに開催を見送った。
3. 「劇場プロジェクト」について特段の活動は行われなかった。
4. 「ゲーム学」について新島進教授を中心に実験授業が行われ、設置科目化へのプロセスが進められつつある。
5. 「高大連携プロジェクト（教養の一貫教育）」については、前年度にはコロナ禍のため実施できなかった慶應義塾高等学校とのプロジェクトが立案され、実行された。
6. 「文理連携プロジェクト」については、2021年度に続き対面式の研究会はできなかったが、オンラインで開催され、さらに2022年度の論文集制作に向けての新たな企画が立案された。
7. 「社会・地域連携研究」については、株式会社コーエーテクモホールディングスの寄付により「日吉学」が設置科目化されており、2021年度は2020年度から続くコロナ禍にも拘わらず、関係者の努力によって履修者が集まり、有効に展開された。また、横山千晶教授による創造力とコミュニティ研究会などの取り組みが進んでいる。

8. 「大学教育カリキュラム研究」については、特段の活動は行われなかったが、今後、コロナ禍において、私たちが否応なく行うことになったオンライン授業の有効導入、日吉に置ける大学院設置、またSDGs、LGBTQなど多様性と共生にむけての新しい課題について、議論が高まることが予想された年度であった。

■一般研究

例年通り、申請のあった研究活動に対して、研究オフィス運営協議会の承認を経て、来往舎2階のプロジェクト研究室（204室、205室）を研究オフィスとして提供した。プロジェクト研究員室（202室）については申請がなかった。これまで、一般研究について、所員の申請はほぼ自動的に認められていたが、まず、研究プロジェクトをコーディネート・オフィスの承認のもとにしっかりと位置付けるべきという考え方に立って、全ての一般研究についてコーディネート・オフィスで審議され、その承認をもって、研究オフィスの提供をおこなった。

■特定研究

2021年度、この項目について特段の活動は行われなかった。

（小菅隼人）

2021年度・プロジェクト研究室（204室・205室）利用申請一覧

研究代表者	研究テーマ
小原 京子・理工学部教授	意味フレームに基づく言語資源の改良と他の言語資源とのリンク
津田 真弓・経済学部教授	デジタル化時代の古典文学・書誌学の研究と教育
阿久澤 武史・慶應義塾高等学校教諭	地域と連携した日吉地区の戦争遺跡の研究と教育的活用

基盤研究

教養教育研究

実験授業「ゲーム学」

ビデオゲームは今日さまざまな分野でプレゼンスを増しており、学生の関心も高い分野である。慶應義塾においても今後、ビデオゲーム研究を体系化し、その成果を塾生と共有することが必要とされる。実験授業「ゲーム学」はこの懸案に対するひとつの試みであった。当初は2020年度春学期に開講が予定されていたが、感染症拡大を受けて中止となり、2021年度秋学期に全5回の日程で実施された（対面とオンラインの併用）。初回では、そもそもゲームをどう定義しうのかという根本的な命題が提起され（井上明人氏）、続いてゲームに依存するメカニズムが脳科学の見地から説明された（藤田博史氏）。理系の立場からは、脳波測定装置のゲームへの応用といった展望が示され（満倉靖恵氏）、経済産業面では、今日起こっているアニメ産業の構造の

変化とゲーム産業との深い関係（平澤直氏）や、桁外れのエンターテインメント市場と化した中国の現状と、そこに斬り込む日本のIP（インテlectual・プロパティ）としてのゲーム（大里雄二氏）といったテーマが組上に載せられた。

学生の期待は大きく、各回とも数百人の事前登録があった。提出されたリアクションペーパーからは、ゲームという概念の幅の広さや、ゲームを大学で扱うことの意義などさまざまな課題を汲みとることができた。こうして得られたさまざまな知見を最大限に活かし、2022年度秋学期より教養研究センター設置科目となる「ゲーム学」開講の準備を進めていきたい。

（新島 進）

教養研究センター主催

実験授業 **ゲーム学** (全5回)

コンピュータゲーム、ビデオゲームは今日、多くの産業、文化、技術分野において中心的な位置を占めています。かつては本や映画が果たしていた役割をゲームが担いはじめ、eスポーツは競技種目として整備されました。こうした発展の一方で、アイテム課金や、ゲーム依存症は新たな社会問題となっています。また、ゲームを考えることは仮想現実とはなにかを考えることでしょう。なぜゲームにハマるのか？ 現実と仮想現実の違いはなにか？ ゲームとアニメ産業がどのような経済的連携をしているのか？

ふだんは楽しむだけのゲームかもしれませんが、そこには多くの疑問が、つまりは学問をする余地があります。各分野の専門家の講義を通じて、ゲームをアカデミックな対象として考察する「ゲーム学」にアクセスしてみませんか？ コーディネーター：新島進（慶應義塾大学経済学部）

【スケジュール】

- 10月15日（金）「ゲームとは何か？」 井上明人（立命館大学映像学部）
- 10月26日（火）「メディアミックスと空間」 三原龍太郎（慶應義塾大学経済学部）
- 11月9日（火）「なぜゲームに依存するのか」 藤田博史（精神分析医・狭山メンタルクリニック院長）
- 11月30日（火）「ミクになり、ミクを演じる、ちょっと楽しい画像解析技術」

満倉靖恵（慶應義塾大学理工学部）

- 12月14日（火）「アニメ産業 20年ぶりの地殻変動とゲーム産業」 平澤直（アーチ株式会社代表取締役）

○各回とも18:15~19:45

○会場：日吉キャンパス 来往舎1階シンポジウムスペース

■参加形式★要事前申込み★

- ①対面（先着順 50名）②オンライン（リアルタイム配信）（定員なし）

<https://bit.ly/3hUUttq>

（要 keio.jp 認証、keio.jp 以外の Google アカウントにログインしているとアクセスできません。一度全てのアカウントからログアウトし、ブラウザを落としてから再度 Keio.jp にログインし直してください。）

★全5回分を事前申込み。

対面・オンライン（リアルタイム配信）を問わず、なるべく全5回に参加してください。

対面参加を希望する場合は、原則、各授業の前日までに申込みをしてください。

※教養研究センターのホームページ URL: <https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/> から申込みができます。

※新型コロナウイルス感染状況により、オンライン（リアルタイム配信）のみの開講になる可能性があります。

■対象：塾生

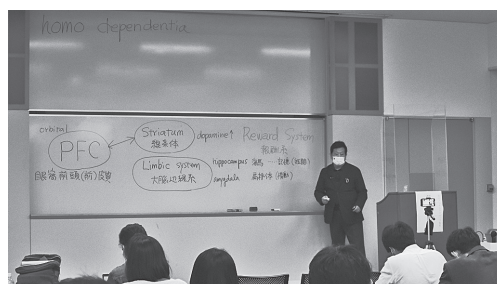
■お問い合わせ：toiawase_lib@info.keio.ac.jp



慶應義塾大学教養研究センター



満倉靖恵氏



藤田博史氏



大里雄二氏

基盤研究

教養連接研究

高大連携プロジェクト

教養の一貫教育 2021 Vol.4 「吉増剛造×空間現代
詩と音楽の交差するところ (2021年10月15日
(金) 15:15 p.m. ~17:30 p.m.)

教養研究センターが慶應義塾高等学校と協同して立ち上げた「教養の一貫教育 Vol. 4」は、第1回を担当した、詩人で三田文学理事長の吉増剛造氏にふたび依頼し、音楽グループの空間現代とのコラボレーションをおこなった。

吉増剛造氏は1960年代から現在まで詩人として最先端を疾走し続けてきた。その創作活動は詩作にとどまらず、音楽・美術・映像・舞踏などさまざまな領域と切り結んで来た。高校、大学を問わず、慶應義塾の学生にとって吉増剛造という第一級の詩人が発する言葉は、彼らが目／耳にする異質な言語であり、今まで用いてきた言語のあり方を再考し、受験等でひとつとおり学んできた約束事(ノモス)からも逸脱する、より豊かな言語の可能性に触れる貴重な経験となった。コロナ禍にあって、詩人が日吉どのような言葉を紡ぐのか、リモートによる〈トボス〉の懸隔の時代にあってどのように言葉を音楽と交響させるのか、それはポストコロナ時代の芸術を考えるにあたっても貴重な場となった。空間現代は坂本龍一などとも共演経験がある京都を中心に活動する音楽グループであり、吉増剛造氏と空間現代は2020年冬の東京都現代美術館においてすでにコラボレーションの経験がある。今回の企画では、詩人が2018年の夏に2か月滞在した石巻での「詩人の家」での経験と、空間現代の最先端の音楽との協同作業をおこなった。

当日は、コロナ禍で開催が直前まで危ぶまれたが、入場人数を事前予約制・大幅制限したかたちで、有観客で開催した。声と音の通路の切り結び。

／(スラッシュ)のズレ、段差、切断。南三陸・志津川町の塾有林を使用した、杉の柔らかなみずみずしさの立ちあがる東北の記憶に寄り添う、慶應義塾高等学校内の日吉協育ホールで3・11の災厄を経た杉の水脈を辿って、東日本大震災の記憶と真摯に向き合ってきた吉増剛造氏は空間現代の音楽と切り結びながら、若林奮遺贈の槌で全力で「霊鎮め／悪魔祓い」をした。学生のなかには「内臓のなかで音の余韻が会の後も続き、興奮して夜も眠れなかった」という感想もあった。高校生の内面のなかに芽生えた一本のみずみずしい樹が、今後時間をかけて生育してくれることを、慶應義塾高等学校と教養研究センターは共同して見守りたい。

(担当:小菅隼人+古川晴彦)



基盤研究

教養連接研究

文理連接プロジェクト

2021年度の本プロジェクトは、2020年度に開始した「文理連接研究会」を継続する形で行われた。2021年度の研究会の企画メンバーは小菅隼人（教養研究センター所長、理工学部）、荒金直人（同副所長、理工学部）、寺沢和洋（同副所長、医学部）、見上公一（理工学部）、井奥洪二（自然科学研究教育センター所長、経済学部）の5名で、毎月1回の研究会が計10回、いずれも遠隔会議方式（Zoom）で開催された。2020年度に続いて全体の共通テーマを「感染」とし、毎回1名の発表者による1時間程度の「話題提供」と、その内容に関する1時間程度の議論が行われた。以下が全10回の「話題提供」の題名と発表者である。

【1】4月30日「ミシェル・セール『パラジット』をめぐる一「寄食」から「感染」を見る」縣由衣子（外国語教育研究センター、フランス現代思想）。【2】5月21日「マルチスピーシーズ人類学からみた動物と人間の境界、そのゆらぎについて」宮本万里（商学部、政治人類学）。【3】6月25日「科学系出版における文理連接」石田勝彦（東京化学同人）。【4】7月30日「宇宙放射線とメディアリテラシー、～コロナ禍は擬似宇宙？～」寺沢和洋（医学部、放射線研究）。【5】9月24日「コロナをきっかけに考えるロボットとのセックスと恋愛」沼尾恵（理工学部、政治哲学）。【6】10月29日「『いま言葉で息をするために』を読む（1）：思想」荒金直人（理工学部、哲学・科学論）。【7】11月26日「『いま言葉で息をするために』を読む（2）：文学」小菅隼人（理工学部、英文学・演劇学）。【8】12月24日「『いま言葉で息をするために』を読む（3）：歴史・宗教・人類学」宮本万里（商学部、政治人類学）。【9】1月28日「ウィズコロナの『モラル』と科学者の役割」見上公一（理工学部、科学技術社会論）。【10】2月25日「ポストコロナのリカバリーを考える」井奥洪二（経済学部、環境科学・医工学）。

以上10回の研究会の詳しい内容は、発表資料と共に、文理連接プロジェクトのブログで「活動記録」として公開されている（<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/bunri/>）。各回の参加者数は順に11名、17名、11名、5名、11名、8名、7名、5名、11

名、10名となっており、マルチスピーシーズ人類学に関する第2回研究会の参加者数が突出しているが、平均して毎回10名程度の参加者がいたことになり、これは、意見交換や議論に多くの時間を割く方針を取っている当研究会としては理想的な人数だと言える。

新型コロナウイルスの感染爆発という社会状況の中で、「感染」という共通テーマの下で行われた2020年度の6回の研究会と2021年度の10回の研究会を振り返ると、文理を接続することの有効性と必要性を改めて実感することができる。同じ「感染」という問題を論じるにしても、例えば免疫学と人類学と演劇学と哲学と科学技術社会論では、非常に異なる観点から現実世界を見ることになる。そして、現実に対峙しようという気持ちが強ければ強いほど、自分の専門とは異なる観点からの考察が参考になる。このことは明らかである。各自が個々の専門分野に留まり、独自の問題意識に基づいて独自の観点から考察をする際に、他分野で展開される考察が参考になり、そこから刺激を受けることができるということ。文理を融合するのではなく接続することの意義はここにある。一つの共通の目的を達成するためにその一端を担う形で協力し合うのではなく、個々の具体的な目的のために互いに刺激を与え合い、しかし大局的には実は同じ方向を見て学問を展開しているということ。これが、2021年度の研究会を終えて感じることでできた、文理接続のあり方である。

2022年度は、共通テーマを発展的に変更すると共に、これまでの「話題提供」に基づく議論以上の深い連携を求めて、年度末に論文集を作成することを前提に、希望者が各自の論文の方向性や途中経過を発表し合う形で、10回の研究会を行うことになった。また、宮本万里氏（商学部）に、上述の5名に加えて6人目の企画メンバーになってもらうことになった。2022年度の共通テーマは「エコロジー」である。コロナ禍を経て再び切実な問題として実感される環境問題について、異なる分野からの连接的な接近を試みたい。

（荒金直人）

研究成果公表 学会・ワークショップ等 開催支援

教養研究センターでは、所員が研究会・ワークショップ等を企画する場合、支援、奨励を行うことで所員の研究・教育の活性化を図っている。

所員による創造的な企画や意欲的な挑戦を奨励し促進することを趣旨としており、2021年度は春学期1件、津田眞弓教授の「日本近世文学会2021年度春季大会」の申請が採択された。

(小菅隼人)

日本近世文学会 二〇二一年度春季大会シンポジウム

デジタル時代の和本リテラシー 古典文学研究と教育の未来

人と人が国や地域を越えてオンラインでつながる。その先にある研究の、教育のあり方とは。デジタル化がもたらす、教育のあり方とは。

「新しい」古典文学研究や教育について、様々な取り組みから見えてくる課題や、今後に向けた知見を共有します。

Textbook
いつれの御時に

2021年
6月12日
[13:30~15:40]
プログラム

- 13:30~ 開会挨拶 小菅隼人 慶應義塾大学教養研究センター所長
- 13:40~ 佐々木孝浩 「書誌学の国際的なeラーニングとワークショップを通じて」 慶應義塾大学附属研究所附属文庫
- 13:50~ ラウラ・モレッティ 「AI時代における和本リテラシー——海外の研究者を育て続ける未来——」 ケンブリッジ大学
- 14:00~ 海野圭介 「大規模画像蓄積からデータ駆動型の研究・教育へ」 国文学研究資料館
- 14:10~ 宮川真弥 「紙面と画面——「翻刻の未来」続貂——」 天理大学附属天理図書館
- 14:20~ 山田和人 「古典教育に学会は何ができるのか——出前授業から見えてきたもの——」 同志社大学
- 14:40~ 全体討議
ディスカッサント：勝又基 / 司会：津田眞弓
明星大学 慶應義塾大学

オンラインで開催します。

参加のお申し込みはこちらへ

主催：日本近世文学会 協賛：慶應義塾大学教養研究センター 共催：白百合大学 後援：文芸春秋 問い合わせ先：info@kinsei.or.jp

日本近世文学会シンポジウム

「デジタル時代の和本リテラシー—古典文学研究と教育の未来—」(オンライン)

2021年6月12日、13:30~15:40、慶應義塾大学教養研究センターにおいて、上記の日本近世文学会の2021年度春季大会シンポジウムを行った。

コロナ禍により人と人が国や地域を越えてオンラインでつながることが日常的に行われることになった。ではその先にある研究の、教育のあり方とはいったいどうあるべきか。日本近世文学会が普及活動をしてきた昔の文字や古典籍が持つ情報を読み解く「和本リテラシー」に関わる事柄、そして古典籍から情報を得て翻刻をするという研究の基礎ともいえるべき行為に焦点を当て、国際化を視野に、デジタル時代にどう研鑽し、どう活用し、どう未来に残していくのかを考える機会にした。登壇者と発表のタイトルは以下の通り。

1、開会の辞、小菅隼人教養研究センター所長。
2、「書誌学の国際的なeラーニングとワークショップを通じて」佐々木孝浩、慶應義塾大学。
3、「AI時代における和本リテラシー——海外の研究者を育て続ける未来——」ラウラ・モレッティ、ケン

ブリッジ大学。4、「大規模画像蓄積からデータ駆動型の研究・教育へ」海野圭介、国文学研究資料館。5、「紙面と画面——「翻刻の未来」続貂——」宮川真弥、天理大学。6、「古典教育に学会は何ができるのか——出前授業から見えてきたもの——」山田和人、同志社大学。ディスカッサント、勝又基、明星大学。司会、津田眞弓、慶應義塾大学。

本企画は、内容から鑑み、国内外からの参加を可能とし、ウェブサイトにてお互いの情報共有につとめ、かつ、YouTubeで動画配信を行った(2021年6月まで)。当日の参加申込みは約660名、動画視聴は約700名。また、閉会後にも続いた参加者との質疑応答や共有すべき情報が<http://user.keio.ac.jp/~sakura/kinsei/Q&A.html>に掲載されている。また学会機関誌『近世文藝』115号(2022年1月)に本シンポジウムの報告や傍聴記が公開された(J-STAGE上には2023年2月公開予定)。

(津田眞弓)

I. 研究関連プロジェクト

研究成果公表

<選書刊行記念企画>

著者と読む教養研究センター選書

—第2回「コミュニティと芸術——パンデミック時代に考える創造力」—

この企画の趣旨は、公開の場で教養研究センター選書の著者に自著の内容について多角的に掘り下げ頂き、センター選書の意義と認知を広めることにある。2022年1月14日、2020年度の末にセンター選書として刊行された横山千晶著『コミュニティと芸術——パンデミック時代に考える創造力』をめぐるシンポジウムが開催された。来往舎のシンポジウムスペースを会場とし、オンラインでも生配信された。

講演者は、著者の横山氏、アートNPO「ST スポット横浜」理事長の小川智紀氏、小菅隼人氏（教養研究センター所長）の三名。まず横山氏が、刊行から約一年を経ての状況について語った。本書は、東京オリンピックが2020年に開催が予定されながらコロナ禍のために翌年に延期されるという異例な事態の中で、本来オリンピックと連携した運動となるべきだった文化企画がいかに影響を受けたか、そして世界的に文化的活動がコロナ禍によっていかに制約され対処を余儀なくされたかを緊急にまとめた、切迫したルポルタージュである。そして、刊行後2021年に結局挙行されたオリンピックを経て2022年となった今、ここでの話は著書の内容をアップデートする機会となり、「パブリック」「アート」「コミュニティ」をキーワードに、新たな形のアンガージュマンの必要性が訴えられた。小川氏からは、横浜で小規模な芸術活動を支援する最前線の現場から、アートを戦略的に用いる傾向と予算問題について説明があり、アートは普段は非日常を提示し、震災やコロナ禍のような非常時には日常を取り戻す手段となるとの指摘があった。小菅氏は、演劇を専門とする立場から、家族、コミュニティ、社会という集団規模それぞれでの今後の可能性について考察し、キリスト教の儀式でも接触が回避されるこ



著者と読む 教養研究センター選書

—選書刊行記念企画—

「教養研究センター選書」とは：教養研究センター所員が独自の論考を平易なスタイルで紹介する、個性ある魅力的なシリーズです。諸国の文学、言語、哲学、芸術表現、社会学など、様々な分野に所属する所員の多様な関心を反映して、多彩なテーマで刊行されています。

「著者と読む教養研究センター選書」とは：「教養研究センター選書」をより広く知ってもらうことを目的として、著者に内容を紹介して頂き、さらにゲストも交えてテーマを掘り下げようという企画です。今回は昨年度刊行された『コミュニティと芸術——パンデミック時代に考える創造力』をめぐる会です。著者である横山千晶氏、アートと社会の接点を探る立場からアートNPOのSTスポット横浜の小川智紀氏、演劇を専門とする小菅隼人氏が登壇し、各自のコメントとディスカッション、および参加者との質疑応答を行います。

選書企画『コミュニティと芸術——パンデミック時代に考える創造力』
2020年の春から世界を混沌に陥れたCOVID-19。この未知なる脅威のもとで、私たちの生活も価値観も一変しました。対面でのコミュニケーションの道は閉ざされ、自由な移動も制限されました。日常の一部だった美術館やコンサートホールも扉を閉めました。そのような状況下で、私たちはあらためて他者の存在に思いを馳せ、コミュニティを再創造し、芸術の意味を考えるようになりました。歴史は繰り返されます。きたるべき未来のために、私たちが創造力を使ってどのように生き延びようとしたのか、しているのかを記憶し、考察することは大きな意義があるでしょう。

日時：2022年1月14日（金）16:30～18:30
<登壇者> 横山 千晶（慶應義塾大学法学部 教授）
小川 智紀（NPO法人STスポット横浜 理事長）
小菅 隼人（慶應義塾大学理工学部 教授）
<司会> 高橋 宣也（慶應義塾大学文学部 教授）

■参加形式 ★要事前申込み★
※新型コロナウイルス感染状況によりオンラインのみの開催になる可能性があります。

①対面参加（40名まで）
※日吉キャンパス来往舎1階シンポジウムスペース
対象：塾生・慶應義塾教職員
<申込み> 要 keio.jp 認証
<https://00m.in/ko114t>

②オンライン参加（Zoom）対象：どなたでも可
<申込み> <https://00m.in/kl14o>
※対面でもオンラインでも事前申込みをお願いします。

■主催・お問合せ：慶應義塾大学教養研究センター toiawase-ib@edst.keio.ac.jp

第2回
コミュニティと芸術
——パンデミック時代に考える創造力
横山 千晶

1/14
Friday
16:30～18:30

とへの疑問が呈され、危機的な状況でも演劇によって正常な思考と日常性が回復できるという主張があった。後半はフロアからの質問を受けながら、三者による討議が行われ、分断化を乗り越える場としてのコミュニティの力と可能性に光が当てられた。

（高橋宣也）

研究交流 研究の現場から

教員が自身の研究内容を自由に語る企画で、参加者による議論も活発に行われる。

2021年度は春学期に1回、秋学期に2回、Zoomによるオンライン形式で開催された。

■第1回 2021年7月14日（通算第31回）

講師：ピーター・バナード（文学部）

「日本近代文学におけるホラーの地誌学——
泉鏡花から震災怪談へ」

バナード先生は、泉鏡花などの日本近代幻想文学を研究対象となさっており、ここでは怪奇文学と地方文学の接点としての「田舎ゴシック」という観点について紹介された。特に、柳田國男『遠野物語』のインフォーマントとして知られる

佐々木喜善の作品『館の家』（1907）について論じられ、民俗学の土台となりつつも、近代性とは異なった土俗性、夢幻性が入り混じった独特な物語となっている様が提示されて、日本人の心性の古層に触れるようなお話であった。

■第2回 2021年11月24日（通算第32回）

講師：林安希子（商学部）

「幼児教育のエスノグラフィ」

林先生は、子どもが社会や文化に適したメンバーになっていく過程を研究されており、幼稚園や保育所での実地調査の方法が紹介され、そこから見えてくるアメリカ、中国、日本の幼児教育の違いについて、子供のけんかにアメリカなら「介入」し、日本では「見守る」という傾向が見られるなど、多くの具体的な例が示された。「グループ・マシュマロ課題」という手法の内容や、今後の成果の展望も伺った。

■第3回 2021年12月22日（通算第33回）

講師：武藤浩史（法学部）

「クリスマスタイムのジェイムズ・ジョイスへ」

武藤先生は、イギリス文学史上の「驚異の年」と呼ばれる1922年、つまりジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』が発表された年から翌年で100年になる機会をとらえて、ジョイスとD・H・ロレンスの類似点を指摘し、『ユリシーズ』の前触れである短編集『ダブリンの人々』にあるクリスマスの集いを描いた「死者たち」その他に見られる恩寵や受胎告知のモチーフの関連性などの宗教性に注目して、教義を脱した新しい宗教体験を重視する読解を示された。

（高橋宣也）



**研究の現場から
Zoom開催！**

「研究の現場から」は研究者交流サロンとして、
教員の研究分野や関心事を紹介し、和やかな雰囲気でお話する会です。
学部や分野を越えての交流も深められます。

第三十一弾 7月14日（水）18:15～20:00 Zoom開催
ピーター・バナード（文学部 助教）
「日本近代文学におけるホラーの地誌学——泉鏡花から震災怪談へ——」

日吉キャンパスでは、大勢の教員が様々な領域で研究教育に取り組んでいます。お互いの研究を知り、情報を交換し合うことで、さらに素敵なアイデアが生まれることもあります。何より、まず知り合いになることが、より豊かな研究教育への第一歩だと教養研究センターは考えます。

★お申し込みは、高橋宣也（文） nobuya@keio.jpまで事前にご連絡ください。

主催：教養研究センター toiwase-lib@adst.keio.ac.jp

1 設置科目

2021年度に開講された設置科目は、別掲の表の通りである。すなわち、どちらも通年の「身体知・音楽」の声乐クラスと器楽クラス、及び半期の「日吉学」であって、コマ数はのべ5という計算になる。前年の2020年度は、開講予定が17コマ、実際に開講されたのが10コマであったから、それと比較するとずいぶん少ないことになる。

理由は何であろうか。2020年度が予定17コマ、実際10コマとなったのは、疫病禍のせいだ。7コマを閉じざるを得なくなったからである。すると、2021年度も前年同様、疫病禍に影響されたのか。そうではない。確かに2021年度も疫病禍は継続し、大学の授業にもさまざまな対応が求められた。が、教養研究センターの得意とする少人数授業については、おおむね開講に障害のない環境が整えられていた。したがって、設置科目の開講コマ数も、疫病禍の来る前の規模に戻して然るべきであった。ところが、別の事情が生じた。教養研究センターの設置科目は寄附講座として開講される。それがセンター開設以来の原則とされてきた。しかも教養研究センターの歴史はある意味、特殊であったと言えるかもしれない。講座ごとに違う寄付元があるのがひとつの自然なかたちなのかもしれないが、教養研究センターの場合は、特定の大口の御寄付によって、設置

科目の多くを長年まとめて支えていただく形態をとってきた。その大口の御寄付元とは極東証券株式会社であった。教養研究センターの設置科目の歴史は極東証券の継続的かつ大規模な御寄付とともに歩んできた。そう表現しても過言ではあるまい。いくら感謝しても足りぬほどのありがたい御縁であった。その歴史に終止符の打たれることが、2020年の夏に決まった。2020年度までで一区切りということになった。経過はいささか急であったので、極東証券寄附講座として運営されてきた設置科目については、2021年度の手当てが間に合わなくなった。そのせいで開講できる科目が減った。株式会社白寿生科学研究所の御寄付による「身体知・音楽ⅠⅡ」と、株式会社コーエーテクモホールディングスの御寄付による「日吉学」のみになった。ひとつの会社にお世話になって、甘えさせていただいていたゆえに、区切り目が来たときに、17コマが5コマになるような、一種の空白や断絶が生じてしまったということになろう。2021年度は仕切り直しのときであり、2022年度からは新しい段階に入っている。この経験を糧として、これまでの御寄付への感謝の念を忘れず、未来につなげていければと、強く念じるところである。

(片山杜秀)

2021年度 教養研究センター設置科目

科 目 名	学期・曜日・時限
株式会社白寿生科学研究所寄附講座	
身体知・音楽Ⅰ—合唱音楽を通じた歴史的音楽実践—	春 水 5
身体知・音楽Ⅱ—合唱音楽を通じた歴史的音楽実践—	秋 水 5
身体知・音楽Ⅰ—古楽器を通じた歴史的音楽実践—	春 土 2
身体知・音楽Ⅱ—古楽器を通じた歴史的音楽実践—	秋 土 2
株式会社コーエーテクモホールディングス寄附講座	
日吉学：戦争編	春 火 5

II 教育開発関連プロジェクト

1 設置科目

1-1 身体知・音楽

[株式会社白寿生科学研究所寄附講座]

教養研究センター設置科目である「身体知・音楽 I II」では、株式会社白寿生科学研究所からの寄付を受けた寄附講座として、2021 年度においてはこれまで通り、2つの授業が開講された。一つは「古楽器を通じた歴史的音楽実践」(器楽クラス)であり、他方は「合唱音楽を通じた歴史的音楽実践」(声楽クラス)であった。后者では、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、授業時における飛沫の拡散が心配されたが、2020 年度の経験を基に対策を施すことにより、濃厚接触者を出すことなく無事に終了することができた。器楽クラスは、通常の形態に近い形で授業を運営した。なお、2021 年度より、2020 年度に日吉に着任した、木内麻理子商学部専任講師(音楽)が、声楽クラスを受け持った。

2021 年度の器楽クラスは、前年度同様、30 人規模のバロック・オーケストラが編成された。古楽器のみを使ったこの規模のオーケストラは非常に珍しく、一般大学だけでなく音楽大学でこのようなことが授業として行われている事例は日本では無く、また、常設のプロの演奏団体すらこのような大きなアンサンブルは、国内ではほとんど見ることがない。授業の成果発表演奏会は、例年通り 2 回行われた。第 1 回となる、室内アンサンブルの演奏会は残念ながら、予定していた第 2 学期の開始時期に、8・9 月に見られた感染症の爆発的拡大のために行うことができず、11 月に延期することになった(その後無事終了した)。年度末に催す、履修者全員が参加する演奏会は、感染症拡大の対策を十分に図った上で 12 月 25 日に開催した。ただし、横浜市の招待で、横浜市新市庁舎で予定されていた、1 月の演奏会は、感染症の拡大が再び見られたため、主催者側



(横浜市)の意向に沿う形で中止となった。なお、これらの演奏会は、できるだけ多くの方々に授業の活動を見てもらうために、2021 年度においても YouTube を介して、演奏会の模様をライブ配信した。

声楽クラスは、履修者の数が 11 名と、感染症拡大以前の頃と比較すれば、2020 年度同様、決して多くはなかった。しかしながら、少人数のメリットを生かして、きめ細かな授業の運営ができる結果となった。成果発表の演奏会は、12 月 8 日に行い、こちらも器楽クラスのそれ同様、入場者の制限を行った関係もあり、YouTube を介したライブ配信を行った。

(石井 明)

1 設置科目

1-2 日吉学

〔株式会社コーエーテクモホールディングス寄附講座〕

—「戦争編」：日吉キャンパスと学生に情熱を注ぐ講座—

日吉学は正規科目となって3年目を迎えた。学生と教員の対話やフィールドワークを重んじる日吉学にとって、コロナ禍は本来の日吉学の活動制限を意味する。趣旨を生かしつつ、どのような授業形式が可能か、2021年度もその選択に頭を悩ませる始まりとなった。緊急事態宣言の合間を縫いながら、テーマ「戦争編」の活動の一つとして連合艦隊司令部の地下壕見学を実施できたことは学生にとって大きな収穫といえる。

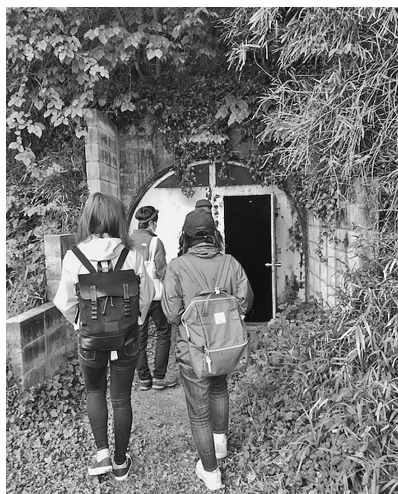
初回（阿久澤武史）にキャンパスの戦争遺跡、第2回に慶應義塾史上の日吉・塾生・戦争（都倉武之）について学び、連合艦隊司令部地下壕に入坑。上原良司（経済学部1943年入学、45年特別攻撃で戦死）の手記を壕内で学生が朗読。同世代の思いが綴られた手記を読むことで、当時の学生の戦争観に触れたり、なぜ日本は戦争を止められなかったのかなど様々な疑問が生まれたり、レポートのテーマ発見となったようだ。第4回（杵島正洋）と第5回（福山欣司）では地質・自然の観点から、ZOOMで岩石の実験を放映し、地下壕建造が可能な理由を考察した。日吉の森とキャンパスの変遷を航空写真の比較で辿り、実際のキャンパス探訪において、さらに各人の課題発見につなげた。第7回（太田弘）には戦争末期の日吉と沖縄の時系列から浮かぶ沖縄の海軍壕の悲惨な状況を講義、沖縄タイムズの与那覇里子氏がZOOMで質疑に登場、第8回（安藤広道）には連合艦隊司令部と鹿屋の航空司令部の日単位の

動向記録によって両者の密接な関係が照射された。第9回・10回（大出敦・不破有理）ではアカデミック・スキルズの講義、授業外にSlack上で学生は教員からコメントや参考文献の紹介を受け、口頭発表へ、さらに発表時の質疑を基にテーマを深化させ、4000字のレポートにまとめた。

日吉学は、研究と教育の経験と知識が惜しみなく注がれ共有される教育の場で、学生を育てる熱い思いが集約された授業といえる。コロナ禍は猿轡をかまされたような状況を生み、歯がゆい思いを感じる場面も多々あったが、意見の双方向性を尊重し、学生も教員も共に学ぶ「半學半教」の教育の場がなんとか確保できた。最後には、恒例、日英バイリンガル版「日吉学修了証」の授与、学生諸君が楽し気に語り合う姿を目にできたこと、そして「受講生のレベルが高く、大学らしい授業だった」「対面で様々な人と日吉について考えられ、友人ができた」「論の立て方や書き方について学べた」、さらには「日吉から世界が見えた」という発言まで飛び出したのは教師冥利に尽きる。あらためて参加学生に、そして担当教員の皆さんに謝意を表したい。

株式会社コーエーテクモホールディングスの襟川陽一社長が快く寄付を延長してくださったおかげで、2022年度には「景観編」の動画を組み合わせた反転授業プログラム作りが始まった。日吉学は歴史を追体験し、新たな歴史の担い手を創る学びの場として、これからも育っていくことを願っている。

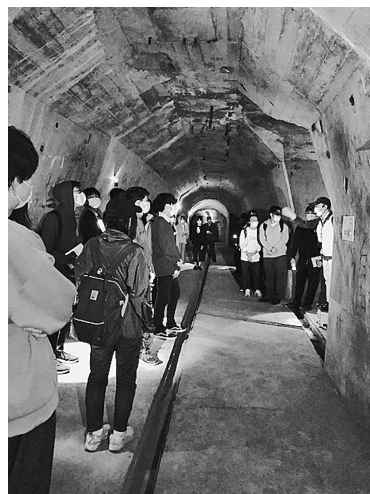
（不破有理）



地下壕見学へ



第一校舎見学 床の図柄に注目



地下壕内でボランティアの方から説明を聞く学生

<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/education/information/>
(高田眞吾)



3「学び場」プロジェクト

このプロジェクトは、教養研究センターと日吉メディアセンターの共同事業である。教養研究センターでは設置科目としてアカデミック・スキルズを設けて来た。その名の通り、大学での学びのためのスキルを身につける授業である。論文を書くための問題設定の仕方、資料収集の仕方、構成の作法、文章のスタイル、註の付け方などを学習し、実際に論文を作成してみる。さらにその内容をプレゼンテーションする。レポートや論文や発表についての技芸を、通年の履修によって養う。少人数制で、しかも1クラスを複数の教員が担当して、個別指導を徹底させる。そうして単位をとってもらって終わりでもいいのだが、せっかく培われたスキルを既修者だけのものにするのも勿体ない。既修者の学びの内容を他の学生に広く還元してもらおう機会があってもよい。大学の図書館に学生相手の学習相談員が配置されることはよくある。授業の受け方やレポートの書き方等を指導する役目だ。大学院生等が相談員に充てられることが一般的に多だろう。その仕事をアカデミック・スキルズの既修者の学部生を中心にして担えないだろうか。学部生の相談相手に学部生になるという、他大学にはあまり類例のないかたち。それが「学び場」プロジェクトである。

だが、この制度も2020年度からは多難な時期を迎えている。同年度には疫病禍により図書館の開館日時が限られ、図書館の利用者も大幅に減少した。学習相談員のカウンター業務は秋学期のうちの36日間だけとなった。しかも、同年度には、普段なら通年で行われるアカデミック・スキルズが、半期のみの開講となった。したがって、2021年度新規採用の学習相談員は、アカデミック・スキルズという授業を、単純計算すると先輩たちの半分しか受けられていない。経験や知識が十分とはいえない状況になった。同年度は疫病禍も続いたとはいえ、図書館の開館日数は増えたけれど、利用者が2019年度以前の数字に復するという事はなかった。2021年度も2020年度に引き続いて茨多き道のりだった。

2021年度の学習相談員のメンバーは修士1年生

レポートの書き方に 困っていませんか？

何を書いたら良いのかわからない…
宿題のプレゼンの基本が知りたい…
引用の仕方が不安…

塾生の塾生による塾生のための
学習相談

☆日時 4月19日(月)～7月9日(金) 平日 11時半～17時半
(実施日時はWEBサイトで確認してください。
「日吉図書館 学習相談」で検索
https://libguides.lib.keio.ac.jp/hys_studyadvice)

☆場所 日吉図書館1階 スタディサポート または Webex

☆利用方法 窓口へ直接お越しください。WEBからの予約やオンライン相談も可能です。

☆問い合わせ先 日吉メディアセンター hmc-ref-group@keio.jp
共催：教養研究センター・日吉メディアセンター・日吉学生部

学習相談の3つの安心 お気軽にご相談ください！

1. ピアメンターが
学生目線で
機嫌に
アドバイスします！

2. 感染対策も
してあります！
(マスク着用、
パーティション設置、
アルコール消毒)

3. オンラインでも
相談できます！
(Webexを使用)
上記のウェブサイト (QRコード)
からアクセス！

2名(文、理、1名ずつ)学部4年生5名(文2名、法1名、理2名)、3年生9名(文2名、経1名、法2名、商1名、理3名)の計16名。総相談件数は136。窓口の開いたのべ日数は126なので、1日に1件を切る勘定となる。疫病禍前の2019年度には同じ126日で総相談件数は396であったから、3分の1にとどまっている。とはいえ、メディアセンターの2021年度の入館者は、2019年度比で、春学期は4分の1、秋学期は半分から3分の1程度と報告されているので、入館者ひとり当たりの相談件数で考えれば、2019年度並みに復してきているとも言える。

2021年度には困難の中でも、学習相談員のみなさんご苦勞のかいもあって回復への光が見えてきた。相談対応のスキルの向上、相談窓口の存在の宣伝などに努めつつ、2022年度を乗り切って行きたい。

(片山杜秀)

1 日吉行事企画委員会 (HAPP)

日吉行事企画委員会 (HAPP) は、日吉のキャンパス内外のコミュニティーを対象とした、もしくは新入生を歓迎することを主な目的とした行事を委員会で企画し、春および秋学期においてそれらを催している。また、秋学期においては、塾生および教職員から企画を募集し、審査を経て採択した催し物を主催している。なお、委員会で企画したイベントは、継続性の強い催し物を優先して開催している。

2021 年度の HAPP が企画した催し物は計 6 つあった。これらには、毎年恒例となっている、舞踏の公演、塾名誉教授や著名者による講演会、複数回の演奏会を含む「日吉音楽祭」、日吉メディアセンターの中でのコンサートが含まれていた。しかしながら、COVID-19 の感染拡大に伴い、中止になる催し物はなかったが、オンラインでの開催のみという形に留まったイベントもあった。

ライブ配信、もしくは録画したものを後日配信という形で実施された企画については、2020 年度の実績もあったということもあり、すべてにおいてスムーズに実施することができた。また、オンラインのメリットでもある、キャンパスに訪れることができない方々に対して催し物を提供することができた。さらには、通常よりも多くの人々に、それぞれのイベントが鑑賞されたのも興味深い事実である。

より通常に近い形で催した演奏会・講演会については、塾のガイドラインに沿って感染症拡大防止の対策を施し、感染症の観点から問題を起こすことなく無事終了することができた。

2021 年度に、オンライン配信の形で実施した企画は、「平家納経の世界 (5 月 8 日他)」、「義太夫節をひとくちはじめての女流義太夫 (6 月 21 日)」、そして「笠井叡舞踏公演 (10 月 13 日収録)」であった。慶應義塾高等学校とのコラボ企画であった「教養の一貫教育 2021 Vol. 4: 吉増剛造×空間現代

詩と音楽の交差するところ (10 月 15 日)」は、高等学校の新校舎内の日吉協育ホールで催された。「ライブラリーコンサート in 日吉」(10 月 15 日他)と「日吉音楽祭 2021 (11 月 6 日他)」については、通常の開催の形だけでなく、ライブ配信を行った。

なお、公募企画については、秋学期にイベントが開催できるかどうか不透明であったため、結果的に公募を中止した。

本来であれば、HAPP の活動は、日吉キャンパスを開かれた大学にしていこうという意図を指すと

ころではあったが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、ある程度活動に制限を設けなくてはならなかったのは残念であった。HAPP の活動については、HAPP のホームページ (<https://happ.hc.keio.ac.jp/>) をご覧いただきたい。

(石井 明)

<新入生歓迎行事>
連続講演企画
平家納経の世界 ―昇華する祈り―

平家琵琶の調べ

―日本人の心の原点
「無常」に触れる―

平家を語り、琵琶を弾く。平曲は盲目の琵琶法師によって語り継がれてきた八百年続く日本の伝統文化です。『平家物語』の本来の姿は、琵琶法師によって語られるものです。近代の演劇とは違う、古来の語りと琵琶の調べを通して、平家一門の運命、温かさや哀しみを感じ、そして、日本の歴史を作ってきた人々の力を体感してください。

〈演奏予定〉「底園精舎」「大塔建立」「卒塔婆流」「源落ち」

講演者：荒尾 努
平曲伝承家長尾源次郎の孫、慶應義塾大学卒業後、三重県立音楽院、数々の舞台・テレビ番組・人として国内外で演奏活動中。

2021年5月8日(土)
14:00~15:30 (オンラインで開催)

申込み・問い合わせはこちらへ
<http://user.keio.ac.jp/~sakura/heike/>

参加費：無料 (登録制)

主催：慶應義塾大学教養研究センター・日吉行事企画委員会 (HAPP)
企画／運営：津田真弓 (経済学部教授)・日本文化研究会
協力：慶應義塾大学アート・センター

2021年
6月21日(月)
18:30~20:00
(収録 18:00)

登録制・無料
オンライン開催

2021年度「芸術文化論」特別公演

義太夫節をひとくちはじめての女流義太夫

ジョギ!

女流義太夫の實力派が聴かせる、名曲「新版歌祭文」野崎村の段。許されぬ恋に落ちたお染と久松。そして久松の許嫁お光の純心の行方はいかに!

竹本 越孝
鶴澤 寛也

オンラインイベントの参加申し込みはWEBサイトへ
<http://user.keio.ac.jp/~sakura/joe/>

演目「新版歌祭文」野崎村の段
義太夫節・太夫 竹本越孝
義太夫節・三味線 鶴澤寛也・ツレ 鶴澤賀寿
解説 原田真澄 (早稲田大学文学部博士課程修了 助教授)

主催 慶應義塾大学教養研究センター・日吉行事企画委員会 (HAPP)
企画 津田真弓 (経済学部教授)
協力 慶應義塾大学アート・センター
制作 佐藤 誠 (経済学部教授)

写真：福田知弘

オンラインイベント ONLINE EVENT

出演 笠井 叡
朗読 笠井 禮示
音響・照明 曾我 傑

2021年12月24日[金]
13:00 配信開始
December 24th Friday, 2021 1pm start

無観客収録配信
慶應義塾大学 2021年度 新入生歓迎行事
笠井 叡 ポスト舞踏公演

使徒ヨハネを踊る
Kasai Akira Post Butoh Performance

キリスト事蹟に関する外典「ヨハネ行伝」のなかに、キリストの言葉として「われ等と共にあり、汝自身を見出さべし。爾を汝、わが弟ららん。けに汝のものなればなり、われこうむらんとする人の子の苦しみは」という言葉があった。と記述しています。「コトバは別体となりて、われらのうちに、宿りたまへり」「イエス、死人の中より甦へてのち、弟子たちに現れ給ひしこと、これにて三度なり」自分の中でも、戸惑いはありますが、コトバとカラダの同一性を通して、ヨハネ自身を表現してみようと思います。

笠井 叡

慶應義塾大学教養研究センター Hiyoshi Arts & Performance Project(HAPP)

10.15 Fri. 15:00~ Jazz

Guitar 井上 智
Organ 土田 晴信
Drums Gene Jackson

Library Concert
2021 日吉図書館1階ラウンジ

予約不要・入場自由 (学内者のみ)
No reservation required / Free admission (only Keio University members)

LIVE 配信も行います。詳細は以下の URL または上記 QR コードから
https://libguides.lib.keio.ac.jp/hys_events#libcon2021

1st Violin 本庄 薫子
2nd Violin 三木 希生子
Viola 阪本 奈津子
Cello 西谷 敦人

10.20 Wed. 15:00~ Quartet

慶應義塾大学教養研究センター
主催 日吉行事企画委員会
日吉メディアセンター

お問い合わせ 日吉メディアセンター
Tel 045-566-1040
Email hmc-refgroup@keio.jp

2021年度 実施企画一覧

No	企 画 名	日 程
1	新入生歓迎行事 平家納経の世界	5月 8日(土) 14:00 ~ 15:30 5月 22日(土) 14:00 ~ 15:30
2	義太夫節をひもとく —はじめての女流義太夫	6月 21日(月) 18:30 ~ 20:00
3	「教養の一貫教育 2021 Vol.4: Voix/Voie 吉増剛造×空間現代 詩と音楽の交差するところ」	10月 15日(金) 15:15 ~ 17:30
4	Library Concert 2021	10月 15日(金) 15:00 ~ (ジャズ) 10月 20日(水) 15:00 ~ (弦楽四重奏)
5	日吉音楽祭 2021	11月 6日(土) 16:00 11月 14日(日) 14:00
6	新入生歓迎行事 笠井叡舞踏公演 「使徒ヨハネを踊る」	12月 24日(金) 13:00 配信開始

[illegible]

11月27日

3時限：「バイリンガルの言語と世界 ―2つ以上の言語と生きる―」

佐々木美帆（慶應義塾大学商学部准教授）

4時限：「人とウイルスの二刀流の戦い」

長谷川直樹（慶應義塾大学医学部教授）

12月11日

3時限：「ミクロとマクロの二刀流 ―量子と時空が織りなす宇宙―」

松浦 壮（慶應義塾大学商学部教授）

4時限：「人生何が起きるかわからない ―太蔵流チャンスをつかむ技術―」

杉村太蔵（元衆議院議員、テレビタレント）

オンラインやハイブリッド（オンラインと対面の両方）での開催についても実地検証も含め検討したが、本講座の特徴を活かし、対面での実施にこだわりつつ、4月の委員会開催の時点での秋頃の感染症の状況を想定し、場合によっては中止も検討される中で以下の対策を行った。

- ・開催にあたってはできるだけ決定を遅らせることができるよう、初日を例年より1ヶ月後ろ倒しとした。
- ・開催期間を例年の9月～12月から見直し、できるだけ短期間で完了するようにした。
- ・感染症予防対策として、受講生数を減らし、できるだけ大きい教室を使用し、教室定員の半数とした。
- ・受講申し込みをこれまでの郵送・FAXを廃止し、web経由のみとし、定員減に伴う減収を経費削減（チラシ等の枚数削減など）によりある程度カバーした。



講義風景

開催テーマとしては、4月頭の時点で決定していたものの、その後の大谷翔平選手の歴史的な活躍もあり、タイムリーなテーマ設定となった。

コロナ禍ということで、受講申し込みが低調になることも想定されたが、募集開始から3日程で定員を上回る申し込みをいただき、盛況となった。受講者アンケートとしても、前年度に引き続き90%程度の受講者から「満足」との回答を得ることができ、無事に講演期間を完了することができた。今後も、アンケート等を参考に改善していける点は積極的に改善し、魅力のある統一テーマを選定、文理両分野の教員が多数在籍する日吉キャンパス・義塾の特徴を活かし、日常的で身近な話題から最先端の研究開発の話題まで分野横断的な講座を展開していければと考えている。

（寺沢和洋）



佐々木美帆氏



長谷川直樹氏



松浦 壮氏

3「創造力とコミュニティ」 研究会

2021年度も新型コロナウイルスの威力は収まることはなく、東京オリンピックを目前にして緊急事態宣言が発令されることとなった。2020年度の夏には日本でも芸術文化の支援策が講じられたが、その効果はどのようなものであったのだろうか。終わりの見えないコロナ禍の中で、芸術家たちはどのように活動を展開してきたのだろうか。今回はその視点から2回の研究会を開催した。

1回目は今までの話し合いによる研究会とは異なる試みとして番外編「コミュニティダンスをファシリテートする」を11月23日に開催した。講師とワークショップ・ファシリテーターを務めたのは、2019年9月に本研究会で発表したダンサーの寒川明香氏である。2019年にはコミュニティとのかかわりをアーティストとして模索したいとの意気込みを話されていた。今回の研究会では、それから2年間の活動をお聞きし、新たにコミュニティダンスのファシリテーターとして活動する中での気づきと身体活動を通じて人のつながりを生み出すことの可能性について語っていただいた。同時に寒川氏をファシリテーターとして、参加者全員でコミュニティダンスを体験した。今回はつい自分が口にする言葉と、日々の中での普段の動きをそれぞれの参加者に出してもらい、そこから一連のダンスを生み出すコミュニティダンスの手法が披露された。

また、12月7日には第13回研究会として、「COVID-19時代の伝統文化」のタイトルのもとに、地唄舞の舞手、花崎杜季女氏と花崎三千花氏をお迎えし、コロナ禍での日本の文化政策と、国や都市の支援からは独立したアーティスト同士の連携と伝統継承の取り組みについて話を聞いた。地唄舞の舞い手であるお二人は、2020年春の最初の緊急事態宣言で公演と練習が1か月休みにになった後、対面での稽古を少人数で再開したという。同時に国よりも早く動いた東京都の助成を受けてオンラインによる発信も行ったが、やはり対面での活動にはかなわないと実感したという。門下生の稽古場に戻りたいという気持ちがそこに寄り添った。舞いとは、身体を動かすだけではない。その場の空気を動かすことである。その場の雰囲気を作り出し、それを広げていくことである。このことをあらためて認識したとお二人は語った。

同時にコロナ禍だからこそ、題材となる物語を全く異なる視点から見直すこともできたと杜季女氏は



語った。2021年11月28日には『平家物語』を平曲、三味線、尺八の演奏者の演奏と共に舞った。そこには、新しい平清盛の解釈を入れた。勝てば官軍負ければ賊軍、という考えや善悪二元の世界ではない。人々がそれぞれ思い切り自分の与えられた運命を生き切った物語と捉えなおしてみたという。これもコロナ禍に置かれた人々の思いをそのまま解釈に載せた結果なのかもしれない。グローバルな活動も展開されている。杜季女氏は2022年春には今まで親交のあったリトアニアで地元の人々と、地元の伝説をもとにした踊りを作る。現地の人々が地唄舞に惹かれるわけは、武道にも通じる「気迫」や「気合」だと言う。ここでも日本の伝統芸能を外の目を通して見直してみる計画が進んでいると言えよう。

**創造力とコミュニティ研究会
番外編**

コミュニティダンスをファシリテートする

2019年9月、この研究会の4回目で開催してくださったダンサー、さやかさんをお呼びし、その際、さやかさんの考えをコミュニティダンスをみんなで作るという。前回はコロナ禍でくるなど想像もしていなかった状況の中、これからコミュニティダンスに取り組もうとしているさやかさんにお話を伺いました。

その横でウイルスと向き合うなかで、コミュニティとダンスはさやかさんの中でどんな風に形を変えてきたのでしょうかを質疑応答を通して体感していただきます。感染症対策に気を付けながら、体を動かしながら、共に考えてみましょう。

●ファシリテーター：さやか（JAZZダンサー）
●日時：2021年11月23日（火）19:00～20:00（予定）
●場所：劇場「ガドベヤ」
横浜市中区石川町5丁目209-3 1階
<http://www.kadobeya2010.net/access/>

●参加費無料
●参加ご希望の方は、横浜国立大学法学部・横山千晶（chacky@kai.jp）までご連絡ください。なお、新型コロナウイルスの感染予防のために、先着10名に限定させていただきます。また、当日は動きやすい格好でいらしてください。

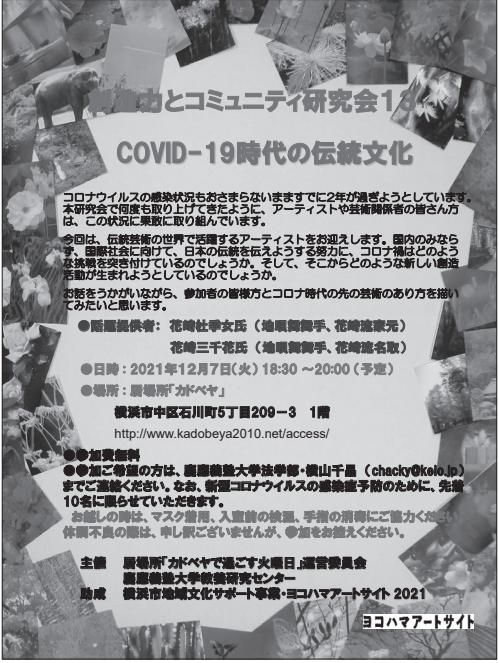
お越しの際は、マスク着用、入館時の検温、手洗いの消毒にご協力ください。体調不良の際は、申し訳ございませんが、参加をお控えください。

主催 劇場「ガドベヤ」で過ごす火曜日運営委員会
横浜国立大学教養研究センター
助成 横浜地域文化サポート事業・コハマアートサイト 2021
ヨコハマアートサイト

伝統芸能の世界も新型コロナウイルスの登場により、新たな展開を見せ始めている。新旧の垣根を超え、同じ伝統芸能同士の垣根を超え、旧来の解釈を塗りなおし、海外へとつながっていく。その動きはアーティストたちが自助のもとに押し広げていったものでもある。

「創造力とコミュニティ」研究会では今後もアーティストたちの活動を追いながら、ポスト・コロナウイルスのコミュニティと芸術の意義を探っていく予定である。

(横山千晶)



創造力とコミュニティ研究会1st
COVID-19時代の伝統文化

コロナウイルスの感染状況もおさまらないまますでに2年が過ぎようとしています。本研究会で何度も取り上げてきたように、アーティストや芸術関係者の皆さん方は、この状況に果敢に取り組んでいます。

今回は、伝統芸術の世界で活躍するアーティストをお迎えします。国内のみならず、国際社会に向けて、日本の伝統を伝えようとする努力に、コロナ禍はどのような影響を与えているのでしょうか。そして、そこからどのような新しい創造活動が生まれようとしているのでしょうか。

お話をうかがいながら、参加者の皆様方とコロナ時代の先の芸術のあり方を描いてみたいと思います。

●開催提供者：花崎社幸女氏（地唄舞手、花崎流家元）
花崎三千花氏（地唄舞手、花崎流名取）

●日時：2021年12月7日(火) 18:30 ~ 20:00 (予定)

●場所：唐場所「カドベヤ」
横浜市中区石川町5丁目209-3 1階
<http://www.kadobeya2010.net/access/>

●参加費無料
●参加ご希望の方は、唐場所「カドベヤ」横山千晶 (chacky@keto.jp) までご連絡ください。なお、新型コロナウイルスの感染リスクのために、先着10名に限らせていただきます。

お越しの際は、マスク着用、入館前の検温、手指の消毒にご協力ください。体調不良の際は、申し訳ございませんが、参加をお控えください。

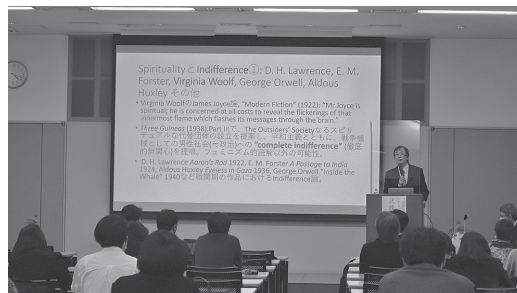
主催 唐場所「カドベヤ」で過ごす火曜日」運営委員会
唐場所「カドベヤ」運営委員会
助成 横浜地域文化サポート事業・ヨコハマアートサイト 2021
ヨコハマアートサイト

4 武藤浩史教授最終講義

2022年2月3日、法学部の武藤浩史教授の最終講義が教養研究センター主催で開催された。来往舎のシンポジウムスペースを会場とし、オンラインでも生配信された。武藤先生は教養研究センターの黎明期から活動と運営に尽力され、副所長などを務められるとともに「身体知」関連の授業を展開され、センターの発展の大きな力であった。

演題は「モダニズム文学のスピリチュアリティーズ」で、近代イギリス文学を専門とする武藤先生は、D・H・ロレンス（『チャタレー夫人の恋人』など）において女性による精神的知覚の拡大が起こっていることに着目し、さらにジェイムズ・ジョイス（『ダブリンの人々』や『ユリシーズ』など）においては、自己への配慮と他者へのケアが相まって人間の幸福に結びついていく様が見られることを指摘して、斬新な読解を示した。こうした文学解釈を基盤とした指摘として、西洋近代に思想において「神は死んだ」となった後の20世紀以降、精神世界は伝統的な既成の宗教や硬直化した教義に頼ることができなくなった一方で、個人の宗教的な体験こそが重視されるようになっていく。そうした知的状況が、ミシェル・フーコーが唱える霊性についての議論などで活性化され、現代における模索まで続いている。こうした、従来の信仰の枠組みにとらわれない、新たな精神の在り方を探ることこそが「スピリチュアリティーズ」ということで、武藤先生は、その壮大な探求の旅に乗り出していく展望を開陳して、思索の深化を期待させる講義であった。退職後も飽くなき研究の道を歩み続けようとするその姿は、最終講義の多くの聴き手に強いメッセージを残していった。最後には会場での活発な質疑応答があり、有志から花束贈呈が行われた。

（高橋宣也）



<教養研究センター主催>
武藤浩史教授 最終講義

武藤浩史教授は、D・H・ロレンスを中心とする20世紀以降のイギリス文学を専門とされています。研究と授業では、文学にとどまらずピートルズの考察など幅広い視野から、現代社会においてさまざまに現れるイギリス文化史の「宗教性」「人生の意味の探求」の形を論究されています。また教養研究センターでは、「身体知」の授業に長く携わり、学生の芸術教育に多大なるご尽力をなされました。この度、ご退職に際して、武藤先生のご貢献に感謝し、教養研究センターにて最終講義を実施いたします。

教養研究センター 副所長 高橋宣也
共起人：高橋宣也、小宮卓人、横山千苗、片山桂秀

日時：2022年2月3日（木）14:45～16:15

①対面参加（40名まで）
日吉キャンパス来往舎1階シンポジウムスペース
対象：塾生・慶應義塾 教職員
<申込み> 要 keio.jp 認証
<https://bit.ly/3GmSwjx>

②オンライン参加（ZOOM）対象：どなたでも
<申込み> <https://bit.ly/3Fi6PVq>

※対面でもオンラインでも事前申込をお願いします。
主催・お問合せ：慶應義塾大学教養研究センター
toiawase-lib@adst.keio.ac.jp



法学部 武藤浩史 教授
慶應義塾大学大学院でイギリス文学を専攻。英国オックスフォード大学で博士号を取得。専門はD・H・ロレンスを中心とする20世紀以降のイギリス文学。著書：『「チャタレー夫人の恋人」から「ピートルズ」まで』など。

法学部 武藤浩史教授 最終講義
モダニズム文学のスピリチュアリティーズ

1 慶應義塾大学教養研究センター規程

平成 14 年 7 月 2 日制定

改正 平成 17 年 6 月 3 日 平成 18 年 5 月 9 日
 平成 20 年 5 月 1 日 平成 20 年 11 月 4 日
 平成 21 年 12 月 15 日 平成 23 年 3 月 29 日
 平成 26 年 12 月 5 日 2020 年 6 月 2 日

(設置)

第 1 条 慶應義塾大学（以下、「大学」という。）に、慶應義塾大学教養研究センター（Keio Research Center for the Liberal Arts。以下、「センター」という。）を置く。

(目的)

第 2 条 センターは、多分野・多領域にまたがる内外の交流・連携に基づく教養研究活動を推進およびこれに関する教育活動を行うことで、知の継承と発展に貢献することを目的とする。

(事業)

第 3 条 センターは、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- 1 教養研究を中心とした知の継承と拡大、発展に資する研究活動
- 2 前号の事業に関する授業科目の設置と教育活動
- 3 教養研究および教育活動に基づく学内外の交流活動の企画、支援
- 4 教養研究および教育活動への助成および支援
- 5 教養研究および教育活動状況の把握と情報の収集および発信
- 6 その他センターの目的達成のために必要な事業

(組織)

第 4 条 ① センターに次の教職員を置く。

- 1 所長
- 2 副所長 若干名
- 3 所員 若干名
- 4 研究員 若干名
- 5 事務長
- 6 職員 若干名

② 所長は、センターを代表し、その業務を統括する。

③ 副所長は、所長を補佐し、所長に事故あるときはその職務を代行する。

④ 所員は、原則として兼担所員とし、センターの目的達成のために必要な研究および職務に従事する。

⑤ 研究員は、特任教員、研究員（有期）または兼

任研究員とし、所長の指示に従い研究に従事する。

⑥ 国内および国外の大学、専門研究機関からの派遣研究者に関しては、別に訪問研究者を置くことができる。

⑦ 事務長は、センターの事務を統括する。

⑧ 職員は、事務長の指示により必要な職務を行う。

(運営委員会)

第 5 条 ① センターに運営委員会を置く。

② 運営委員会は、次の者をもって構成する。

- 1 所長
- 2 副所長
- 3 事務長
- 4 大学各学部長
- 5 大学各学部日吉主任
- 6 日吉研究室運営委員長
- 7 日吉メディアセンター所長
- 8 日吉 ITC 所長
- 9 体育研究所長
- 10 外国語教育研究センター所長
- 11 自然科学研究教育センター所長
- 12 日吉キャンパス事務長
- 13 その他所長が必要と認めた者

③ 委員の任期は、役職で選任された者はその在任期間とする。その他の者の任期は 2 年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

④ 運営委員会は所長が招集し、その議長となる。

⑤ 運営委員会は、次の事項を審議する。

- 1 センター運営の基本方針に関する事項
- 2 センターの事業計画に関する事項
- 3 研究プログラムに関する事項
- 4 人事に関する事項
- 5 予算・決算に関する事項
- 6 コーディネート・オフィスに関する事項
- 7 その他必要と認める事項

(コーディネート・オフィス)

第 6 条 ① センターの事業活動を円滑かつ効率的に遂行するために、運営委員会の下にコーディネ

ネット・オフィスを置く。

- ② コーディネート・オフィスは、所長、副所長、事務長およびコーディネーター若干名をもって構成する。コーディネーターは、所長、副所長、事務長とともに、センターの事業を推進する。

- ③ コーディネート・オフィスは、必要に応じて委員会を置き、センターの事業活動の一部を付託することができる。

(特別委員会)

第7条 運営委員会は、必要に応じて特別委員会を置き、第5条第5項に定める審議事項の一部について審議を付託することができる。

(教職員の任免)

第8条 ① センターの教職員等の任免は、次の各号による。

- 1 所長は、大学評議会の議を経て塾長が任命する。

- 2 副所長、所員および兼任研究員は、所長の推薦に基づき、運営委員会の議を経て塾長が任命する。

- 3 特任教員および研究員（有期）については、「任免規程（就）（昭和27年3月31日制定）」の定めるところによる。

- 4 訪問研究者については、「訪問学者に対する職位規程（昭和51年8月27日制定）」の定めるところによる。

- 5 事務長および職員については、「任免規程（就）（昭和27年3月31日制定）」の定めるところによる。

- 6 コーディネーターは、所員および義塾職員の中から、所長が推薦し、運営委員会が委嘱する。

- ② 所長、副所長およびコーディネーターの任期は2年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

- ③ 所員の任期は2年とし、重任は妨げない。

- ④ 兼任研究員の任期は、次条に定める研究プログラムの研究期間とする。

(研究プログラム)

第9条 ① センターに次の研究プログラムを置く。

- 1 基盤研究：専任教員が核となって展開する、教養研究を中心とした共同研究

- 2 一般研究：センターが必要と認めた個人研究

または共同研究

- 3 特定研究：センターが企画、立案した研究

- ② 研究プログラムの企画・募集・選定・管理・統括等の詳細については、運営委員会で別に定める。

(契約)

第10条 ① 外部機関等との契約は、慶應義塾の諸規程等に則り行うものとする。

- ② 学内機関等との契約は、運営委員会の議を経て所長が行うものとする。

(経理)

第11条 ① センターの経理は、「慶應義塾経理規程（昭和46年2月15日制定）」の定めるところによる。

- ② センターの経費は、義塾の経費、委託研究資金、国または地方公共団体等からの補助金、寄附金およびその他の収入をもって充てるものとする。

- ③ 外部資金の取扱い等については、学術研究支援部の定めるところによる。

(規程の改廃)

第12条 この規程の改廃は、運営委員会の審議に基づき、大学評議会の議を経て塾長が決定する。

附 則

- ① この規程は、平成14年7月1日から施行する。

- ② この規程は、施行後3年を目途に見直すものとする。

附 則（平成17年6月3日）

この規程は、平成17年6月3日から施行する。

附 則（平成18年5月9日）

この規程は、平成18年5月9日から施行し、平成18年5月1日から適用する。

附 則（平成20年5月1日）

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附 則（平成20年11月4日）

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附 則（平成21年12月15日）

この規程は、平成21年10月1日から施行する。

附 則（平成23年3月29日）

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

附 則（平成26年12月5日）

この規程は、平成26年4月1日から施行する。

附 則（2020年6月2日）

この規程は、2020年7月1日から施行する。

2 運営委員会委員

2021年4月1日～2022年3月31日在籍者

第10期（2019年10月1日～2021年9月30日）

第11期（2021年10月1日～2023年9月30日）

教養研究センター担当常任理事

青山藤詞郎（2021年5月27日まで）

山内 慶太（2021年5月28日から
7月31日まで代行）

奥田 暁代（2021年8月1日から）

教養研究センター所長

小菅 隼人

教養研究センター副所長

片山 杜秀

高橋 宣也

荒金 直人

寺沢 和洋

教養研究センター事務長

大古殿憲治

文学部長 松浦 良充（2021年7月31日まで）

倉田 敬子（2021年8月1日から）

経済学部長 池田 幸弘（2021年9月30日まで）

駒形 哲哉（2021年10月1日から）

法学部長 岩谷 十郎（2021年7月31日まで）

堤林 剣（2021年8月1日から）

商学部長 岡本 大輔

医学部長 天谷 雅行（2021年7月31日まで）

金井 隆典（2021年8月1日から）

理工学部長 岡田 英史（2021年7月31日まで）

村上 俊之（2021年8月1日から）

総合政策学部長

土屋 大洋（2021年7月31日まで）

加茂 具樹（2021年8月1日から）

環境情報学部長

脇田 玲（2021年9月30日まで）

一ノ瀬友博（2021年10月1日から）

看護医療学部長

武田 祐子

薬学部長 三澤日出巳

文学部日吉主任

坂本 光（2021年9月30日まで）

市川 崇（2021年10月1日から）

経済学部日吉主任

柏崎千佳子

法学部日吉主任

奥田 暁代（2021年7月31日まで）

大久保教宏（2021年8月1日から）

商学部日吉主任

大矢 玲子（2021年9月30日まで）

福澤 利彦（2021年10月1日から）

医学部日吉主任

井上 浩義（2021年9月30日まで）

南 就将（2021年10月1日から）

理工学部日吉主任

井上 京子

薬学部日吉主任

大谷 壽一（2021年8月31日まで）

大澤 匡範（2021年9月1日から）

体育研究所所長

石手 靖

日吉メディアセンター所長

横山 千晶

日吉ITC所長

安田 淳

外国語教育研究センター所長

七字 眞明

自然科学研究教育センター所長

井奥 洪二

日吉研究室運営委員会委員長

大出 敦（2021年9月30日まで）

高桑 和巳（2021年10月1日から）

日吉キャンパス事務長

國分 紀嗣

日吉学生部事務長

千葉 徹（2021年5月31日まで）

寺島 博之（2021年6月1日から）

日吉メディアセンター事務長

長島 敏樹

日吉キャンパス事務センター課長

川田 孝征

日吉行事企画委員会（HAPP）委員長

石井 明

日吉キャンパス公開講座運営委員会委員長

寺沢 和洋

3 組織構成員

2021年4月1日～2022年3月31日

所員：186名（2022年3月31日現在）

所長：小菅 隼人（理）

副所長：片山 杜秀（法）

高橋 宣也（文）

荒金 直人（理）

寺沢 和洋（医）

コーディネーター：

坂本 光（文・2021年9月30日まで）、

柏崎千佳子（経・2021年10月1日から）、

新島 進（経）、武藤浩史（法）、種村和史（商）、

西尾宇広（商）、鈴木亮子（経）、高山 緑（理）、

不破有理（経）、徳永聡子（文）、高田眞吾（理）、

神武直彦（SDM研究科）、石井 明（経）、

國分紀嗣（日吉キャンパス事務長）、

大古殿憲治（教養セ事務長）

広報担当：高橋宣也（文）

日吉行事企画委員会（HAPP）

委員長：石井 明（経）

委員：高橋宣也（文）、津田眞弓（経）、大出 敦（法）、

竹内美佳子（商）、小菅隼人（理）、小林拓也（理）、

石手 靖（体研）、瀧谷麻由美（保セ）、

國分紀嗣（日吉キャンパス事務長）、川田孝征（運営サ）、

周藤有実（運営サ）、友田明文（学生部）、

五十嵐暁俊（学生部）、長島敏樹（日吉メディアセ）、

今井星香（日吉メディアセ）、鈴木都美子（教養セ）

極東証券寄附講座運営委員会（2021年9月30日まで）

委員長：小菅隼人（理）

委員：片山杜秀（法）、高橋宣也（文）、荒金直人（理）、

寺沢和洋（医）

白寿生科学研究所寄附講座運営委員会

委員長：小菅隼人（理）

委員：片山杜秀（法）、高橋宣也（文）、

荒金直人（理）、寺沢和洋（医）、

石井 明（経）

コーエーテクモホールディングス寄附講座「日吉学」運営委員会

委員長：小菅隼人（理）

委員：片山杜秀（法）、高橋宣也（文）、

荒金直人（理）、寺沢和洋（医）、

不破有理（経・2021年9月30日まで）、

大出 敦（法・2021年10月1日から）

「日吉学」企画委員会

委員長：不破有理（経・2021年9月30日まで）、

大出 敦（法・2021年10月1日から）

委員：小菅隼人（理）、片山杜秀（法）、高橋宣也（文）、

安藤広道（文）、福山欣司（経）、長田 進（経）、

有川智己（経）、神武直彦（SDM研究科）、

都倉武之（福澤研究セ）、阿久澤武史（塾高）、

太田 弘（元普通部）、杵島 正洋（塾高）、

大出 敦（法・2021年9月30日まで）、

不破有理（経・2021年10月1日から）

「ゲーム学」企画委員会（2021年10月1日から）

委員長：新島 進（経）

委員：寺沢和洋（医）、

小菅隼人（理・2022年3月15日まで代行）、

山下一夫（理・2022年3月16日から）

「生命の教養学」企画委員会（2021年10月1日から）

委員長：西尾宇広（商）

委員：有川智己（経）、石川 学（商）、川添美央子（商）、

宮本万里（商）、荒金直人（理）、坂内健一（理）、

清水史郎（理）

日吉キャンパス公開講座運営委員会

委員長：寺沢和洋（医）

委員：高橋宣也（文）、有川智己（経）、石井 明（経）、

川添美央子（商）、小菅隼人（理）、沼尾 恵（理）

神武直彦（SDM研究科）、野口和行（体研）、

國分紀嗣（日吉キャンパス事務長）

庄内セミナー実行委員会

委員長：鈴木亮子（経）

委員：小菅隼人（理）、鳥海奈都子（塾高）、

荒金直人（理・2021年11月30日まで）、

ミヤンマルティン、アルベルト（経・2021年12月1日から）

教養研究センター事務局

大古殿憲治（事務長）

鈴木都美子、池本晶子、富田いづみ、

鈴木知子

4 2021 年度の主な活動記録

Date		Events
4	1 日～ 6 日	教養研究センター設置科目ガイダンス（オンデマンド配信・keio.jp 認証）
	20 日	第 1 回コーディネート・オフィス会議
	27 日	第 1 回運営委員会
	30 日	第 1 回所長・副所長会議
	30 日	基盤研究 文理連接プロジェクト研究会 第 1 回「ミシェル・セール『パラジット』をめぐってー「寄食」から「感染」を見る」縣由衣子
5	8 日・22 日	HAPP 企画「平家納経の世界」
	15 日	ニュースレター 38 号刊行
	21 日	基盤研究 文理連接プロジェクト研究会 第 2 回「マルクス・ピーシーズ人類学からみた動物と人間の境界、そのゆらぎについて」宮本万里
6	1 日	第 2 回所長・副所長会議
	12 日	学会・ワークショップ等開催支援「日本近世文学会 2021 年度春季大会シンポジウム」
	16 日	第 2 回コーディネート・オフィス会議
	21 日	HAPP 企画「義太夫節をひもとくーはじめての女流義太夫（ジョギ!）」
	25 日	基盤研究 文理連接プロジェクト研究会 第 3 回「科学系出版における文理連接」石田勝彦
7	7 日	第 3 回所長・副所長会議
	8 日	情報の教養学「30 分でマスターする著作権」動画配信開始 福井健策
	14 日	第三十一弾 研究の現場から「日本近代文学におけるホラーの地誌学——泉鏡花から震災怪談へ——」ピーター・バナード
	30 日	基盤研究 文理連接プロジェクト研究会 第 4 回「宇宙放射線とメディアリテラシー、～コロナ禍は擬似宇宙?～」寺沢和洋
8	4 日	第 3 回コーディネート・オフィス会議
9	2 日	第 2 回運営委員会
	24 日	基盤研究 文理連接プロジェクト研究会 第 5 回「コロナをきっかけに考えるロボットとのセックスと恋愛」沼尾恵
	27 日	第 4 回所長・副所長会議
10	15 日	HAPP 企画／高大連携プロジェクト「教養の一貫教育 2021 Vol.4:Voix/Voie 吉増剛造 ×空間現代 詩と音楽の交差するところ」
	15 日・20 日	HAPP 企画「ライブラリーコンサート 2021 in 日吉」
	15 日、11 月 9 日、30 日、12 月 14 日、2022 年 1 月 19 日	教養教育研究 実験授業「ゲーム学」
	27 日	第 5 回所長・副所長会議
	29 日	基盤研究 文理連接プロジェクト研究会 第 6 回「『いま言葉で息をするために』を読む（1）：思想 荒金直人
	30 日、11 月 6 日、13 日、27 日、12 月 11 日	日吉キャンパス公開講座「二刀流の豊かな世界」
11	6 日	HAPP 企画「日吉音楽祭 2021 古楽アカデミー・室内アンサンブル演奏会」
	10 日	情報の教養学講演会「塾生としての理想の追求」伊藤公平
	14 日	HAPP 企画「日吉音楽祭 2021 室内楽・ピアノマラソンコンサート」
	18 日	第 4 回コーディネート・オフィス会議
	19 日	第 3 回運営委員会
	23 日	創造力とコミュニティ研究会 番外編：コミュニティダンスをファシリテートする
	24 日	第三十二弾 研究の現場から「幼児教育のエスノグラフィ」林安希子
	26 日	基盤研究 文理連接プロジェクト研究会 第 7 回「『いま言葉で息をするために』を読む（2）：文学 小菅隼人
	29 日	第 6 回所長・副所長会議
	30 日	ニュースレター 39 号刊行
12	1 日	情報の教養学講演会「歴史学の情報戦略」岩波敦子
	7 日	創造力とコミュニティ研究会 第 13 回：COVID-19 時代の伝統文化
	8 日	少人数合唱による小演奏会
	22 日	コレギウム・ムジクム・オーケストラ演奏会
	22 日	情報の教養学講演会「機械知能のグランドチャレンジ」杉浦孔明
	22 日	第三十三弾 研究の現場から「クリスマスタイムのジェイムズ・ジョイスへ」武藤浩史
	24 日	基盤研究 文理連接プロジェクト研究会 第 8 回「『いま言葉で息をするために』を読む（3）：歴史・宗教・人類学 宮本万里
		HAPP 2021 年度新入生歓迎行事 笠井叡舞踏公演 動画配信開始
	25 日	古楽アカデミー・オーケストラ演奏会

1	7日	第7回所長・副所長会議 ＜選書刊行記念企画＞著者と読む教養研究センター選書 第2回 コミュニティと芸術 ーパンデミック時代に考える創造力 横山千晶 基盤研究 文理連接プロジェクト研究会 第9回「ウィズコロナのモラルと科学者の 役割」 見上公一
	14日	
	28日	
2	3日	武藤浩史教授 最終講義 「モダニズム文学のスピリチュアリティーズ」 基盤研究 文理連接プロジェクト研究会 第10回「ポストコロナのリカバリーを考 える」 井奥洪二 第5回コーディネート・オフィス会議
	25日	
	28日	
3	3日	第4回運営委員会 第8回所長・副所長会議
	30日	

慶應義塾大学教養研究センター
2021年度 活動報告書

2022年8月31日発行
編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター
代表者 小菅隼人

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL 045-566-1151

Email lib-arts@adst.keio.ac.jp

<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

印刷・製本 サンパートナーズ(株)



慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for the Liberal Arts